



Title	ニホンザル集団の変遷：岡山県勝山集団について
Author(s)	糸魚川, 直祐
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41079
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{いと}糸 ^い魚 ^{がわ}川 ^{なお}直 ^{すけ}祐

博士の専攻分野の名称 博 士 (人間科学)

学 位 記 番 号 第 1 4 0 4 0 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 10 年 5 月 20 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 ニホンザル集団の変遷
—岡山県勝山集団について—

論文審査委員 (主査)
教授 中島 義明
(副査)
教授 白樫三四郎 教授 和 秀雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ニホンザル集団の変遷をメンバーの個体史に基づいて明らかにする目的により、岡山県勝山に生息する集団を対象に、1958年の餌付け以降1994年の間、メンバーの個体資料を分析し、集団の構成と構造の変化を探究したものである。

集団の変遷は、全体としてみると、集団の維持・拡大、集団の分裂と新しい集団の形成、その繰り返しであり、その過程のなかで、集団の分裂が最重要なできごとであることが分かった。

集団のまとまりと分裂は、成員数、成体メス/オスの頭数比、成体メスの出産率の変化、母子を中心とする血縁系の消長、成体オスの去就、成体メスと成体オスの関係などメンバーの個体関係を手がかりにとらえることができた。

集団は、複数の異なる血縁系の成体メス、成体メスと共存する複数の成体オス、かれら相互の関係を基本にまわっており、集団のまとまりに関する原則として、次の3つが導かれた。

(1) 「高位オス年長傾向」の原則。

この原則は、優劣順位が高い成体オスほど年齢が高く、優劣順位が低い成体オスほど年齢が低い傾向をいう。集団の変遷は、成体オスの立場からすると、「高位オス年長傾向」の確立、維持、崩れ、再編成の過程であった。

(2) 「高位・上昇血縁系高出産率」の原則。

この原則は、優劣順位が高い血縁系ほど、あるいは優劣順位が上昇する血縁系ほど、血縁系における成体メスの平均出産率は高くなることをいう。集団の変遷は、成体メスの立場からすると、繁殖活動を高めるべく集団内の優劣順位を高める過程、あるいは新しい集団をつくり、繁殖活動を高める過程であった。

(3) 「近縁成体オス・メスの離反」、「非近縁成体オス・メスの和合」の原則。

この原則は、近縁の成体オス・メスは、配偶関係を持たず、疎遠になり、非近縁の成体オス・メスは、配偶関係を持ち、保護・依存し、親密になることをいう。集団の変遷は、成体オスと成体メスの関係からすると、両者が「近縁成体オス・メスの離反」、「非近縁成体オス・メスの和合」の原則に添い、よりよくまとまり、より高い繁殖活動を達成する過程であった。

このような原則は、集団のメンバーの性・年齢、血縁関係、優劣関係、繁殖活動などから得られた一般原則であり、個々のメンバーの立場とどの程度整合するかを吟味しなければならない。

このため、原則に矛盾するかに見える個別事例を検討したところ、個体の立場と一般原則は基本的には矛盾せず、集団の変遷はさまざまな個体の生涯と行動をふまえ、全体として原則に添って展開することが分かった。

勝山集団は、餌付け前より現在に至るまで、人から強い駆逐圧力を受けてきたが、分裂を繰り返しながら集団のまとまりと繁殖活動を維持し続けた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、岡山県勝山町に生息する準閉鎖的集団を成すニホンザルにつき、個体を特定し、その生涯発達を心理学と比較行動学 (ethology) の立場より観察することによって、集団の構成 (composition) と集団の構造 (structure) の変化を探究したユニークな研究である。ニホンザルの集団の変遷は、その維持、拡大、分裂、新しい集団の形成、そのくり返しとして記述できるが、その中でも分裂が最重要な出来事と考えられる。

本論文の第一の功績は、申請者が観察にタッチした36年間という長期にわたる年月の間に生起した分裂に焦点を合わせ、集団のまとまりを支配する原則を明らかにしようとした点である。その作業の中で、①「高位オス年長傾向」の原則、②「高位・上昇血縁系高出産率」の原則、③「近縁成体オス・メスの離反」、「非近縁成体オス・メスの和合」の原則、という3つの一般原則を抽出している。

本論文は、また、これら一般原則を抽出した後に、これらの原則が個々のメンバーの立場とどの程度整合するかを綿密に検証し、原則としての妥当性が十分なものであることを示している。

長期間にわたる多量の個体の行動観察データから個体群 (集団) のまとまりすなわち形成、維持、変容のメカニズムを総合的観点より解明してみせた研究は世界的にも例がなく、高く評価される。加うるに、険しい山間の地に自ら入り、1958年に餌付けを開始して以来今日まで、十分とは言い難い研究環境を地道に整備し、この領域における先導的役割を果たしてきた申請者にしてはじめて構築可能な論文である点についても、高く評価されるべきである。

以上の理由により、本論文は博士学位論文として余りあるものと認定する。